

《論文》

メルヴィルの後期小説における〈語り〉（４）

—「失敗」の物語

鱒渕 祐一

メルヴィルの後期小説における〈語り〉(4) —「失敗」の物語

罇 渕 祐一

和文抄録：本稿の目的は1850年代初頭に、ハーマン・メルヴィルが匿名で発表した「失敗」をテーマにした3編の短編小説、“Happy Failure”、“The Fiddler”、“Jimmy Rose”を取り上げ、それぞれの「失敗」の本質を解明し、メルヴィルが託した意味と価値観を見出していくことである。

キーワード：ハーマン・メルヴィル、短編小説、失敗

序

1853年当時、ハーマン・メルヴィルは*Pierre*の不評と商業的失敗により、職業作家としての地位が危ぶまれていた。イギリスの批評家Francis Jacoxは、*Moby-Dick*を評して（*Pierre*は注目すらされていなかった）、

The style is maniacal—mad as a March hare—mowing, gibbering, screaming, like an incurable Bedlamite, reckless of keeper strait waistcoat.⁽¹⁾

とこき下ろし、*Typee*や*Omoo*を書いた作家の復活を望んでいる。時代を遥かに先んじていた天才の宿命ゆえのことか、四面楚歌の状況のなか、出版社の勧めもあり、メルヴィルは匿名で短編小説を発表しながら糊口を凌ぐ生活が続くことになる⁽²⁾。

本稿においては、そんな過酷な境遇の下で、自らになぞらえたかのような失敗者の姿を描いた三編の小作品⁽³⁾を分析しながら、創作者であるメルヴィルの実像に迫りたいと思う。

1. “The Happy Failure: A Story of the River Hudson” (1854) —失敗の中に光明を見る人—

無名の語り手が、若かりし頃の回想として語るこの短編小説は、1854年7月に*Harper's New Monthly Magazine*に掲載された。少年と思われる語り手は、ハドソン川で、叔父（彼もまた無名である）とその黒人老従者Yorpy（Dutch Africanと語り手は言う）と落ち合い、小舟に叔父が10年の努力の末発明したとされる「装置」(apparatus)を積み込み、上流を目指すという。その装置なるものの「すばらしい実験がどんな性質のものか、設計者以外には未だに謎のままである⁽⁴⁾」。しかし、うら若き語り手にとってさえも、(叔父は彼を“youngster”「小僧」と呼んでいる)その装置たるや「打ち捨てられたような、精彩を欠いた古びた灰箱」(p.254)にしか見えない代物である。すでにこの叔父の目論見が徒勞に終わるのではないかという暗示に他ならない。一行が目指すというのが、10マイル上流の“Quash Island”だという。そして、その中の島で行われるという、

栄光ある実験とは、叔父が呼ぶところの、件の装置“Great Hydraulic-Hydrostatic Apparatus”によって、湿地や沼地の水を排水し、肥沃な農地に転換しようという試みであることが、途上の船上で明かされる。叔父はこの実験が成功した暁には、一攫千金を体現できると夢見ている。そして、あまり乗り気ではない語り手には意を介さず、近い将来、自らがこの世を去った後の世界に思いを馳せこう言う。

“... if you care not, I repeat, to have this proud thing to tell—I far future days when poor old I shall have been long dead and gone, boy—to your children, and your children’s children; in that case, sir, you are free to land forthwith.” (p.255)

この作品のもつimageryの数々は、創作当時のメルヴィル自身の心境を吐露していると思わざるを得ないほど、顕著に散見される。先ず、叔父はこの10年間、人知れず大いなる栄光と発展をもたらす筈である画期的装置の研究に没頭してきた。そしてその実験を誰にもスパイされることがないように、10マイル上流のQuash島にて秘密裏に決行しようと企図している。この名無しの人物こそ、作者メルヴィルの戯画化されたalter-ego(分身)ではないだろうか。この作品の原稿がHarper’s社に投稿されたのが、1853年。*Moby-Dick* (1851年)、*Pierre* (1852年)の「失敗」の直後である。その約10年前、1842年、にメルヴィルはタイピー族と1ヶ月ほど過ごした経験に基づき、1846年に処女長編小説*Typee*出版に漕ぎつけた。食人種の間で暮らした男というエキセントリックな語りの手法も手伝い、メルヴィルは2000ドルを手にする成功を収めた⁽⁵⁾。翌1847年には、その続編の*Omoo*が出版され、こちらも概ね好評を博した。しかし、メルヴィルの叙述は、ノンフィクションの類として受容されその信憑性が疑問視されたりと、事実に基づく冒険譚の作者として認知されてしまったため、この後にメルヴィルが進んでいく文学的真理探求のフィクションの形態は、ほとんど理解されることはなくなるのである。1849年発表の*Mardi*も*Omoo*の続編の海洋小説として書き始められたが、その過程でより複雑な作品へと進化を遂げ、様々なテーマと語りの手法が繁茂し、豊穡な語りの挑戦的小説となったが、結果的に批評家や識者を当惑させるだけだった。そして、1851年の*Moby-Dick*、1852年の*Pierre*という真理探求の物語の敗北へと続く。

メルヴィルにとって、この10年余りの歳月は、前進しようとする意思、文学的テキストの上での語りの挑戦の過程であり、19世紀ロマン主義の時代的潮流を超えていたのかもしれない。まさに、時代の流れに遡って進むとうとする苦難と試練が凝縮されたような時間であった。

叔父は小舟の上で、川の流れて逆らって上流に漕ぎ進む語り手にこう吐露する。

“Glory is not to be gained, youngster, without pulling hard for it—against the stream, too, as we do now. The natural tendency of man, in the mass, is to go down with the universal current into oblivion.” (p.256)

この言葉はある意味普遍的真理であり、教訓であるといえる。メルヴィルのalter-egoである叔父は、ある種の普遍的価値観を全面に押し出し、力業で自らの境遇を跳ね返そうとしているかに見える。矮小化したAhabと言えなくもないが、メルヴィルはそこまでして自らをシニカルに戯画化したのだろうか。確かに、叔父の描き方には、コメディの要素が見出される。Dillinghamも指摘しているように、「叔父は頭の変な発明家で、10年間も馬鹿げた機械にかかずらい、それがきちんと動くのかどうか確かめるための試験を一度もしなかった。老齢ではあるが、まるで癡癪持ちの子どものように振る舞う。装置が作動するのに失敗すると、たちまちかっとなって、機械を引き裂き怒り狂った悪童のように蹴飛ばす⁽⁶⁾」。だが、今こうして叔父の愚行を最後まで見届け、その後長い年月が過ぎ臨終の際にも付き添った語り手は、もはや少年ではなく、成熟した大人と見做すことが出来る。(p.261) それゆえに語り手は、叔父に慈悲深い視線を投げかける。叔父が失敗したことをむしろ嬉しく思っていると最後に告白した場面を回想し、語り手はこう感慨に浸るのである。

His face kindled with a strange, rapt earnestness, I have never forgotten that look. If the event made my uncle a good old man, as he called it, it made me wise young one. Example did for me the work of experience. (p.261)

この作品における語り手の視点は、実は成熟した倫理的規範に則っている。叔父の無謀な行為には時に疑義を呈し、時に諫めるようなこともする。そしてその最中にあっても叔父の中に価値を見出そうとする。もし、叔父が戯画化されたメルヴィルのalter-egoを象徴しているとすれば、この無名の語り手が表しているのは何か。叔父の存在が、精神分析でいうところの無意識の本能的衝動、欲求等の精神的エネルギーの源泉が表出された、すなわち、メルヴィルのego (id) と見做すならば、語り手の担っている役割は、egoの検閲を行う倫理的価値基準の具現であるsuper-egoといえるだろう。ある意味では、当時の批評家や識者が共有していた社会通念、社会規範という尺度でもあったろう。

10年の徒労を具現する叔父は、初めから失敗する宿命を背負っていた。彼らが向かっていた実験場は無人の“Quash Island”であった。‘quash’には、「無効にする」、「破棄する」という意味がある。10年の苦難と死力の結晶たる‘Great Hydraulic-Hydrostatic Apparatus’が、結局はびくりとも動かず、機械として「無効」であることが明らかになった時、叔父は怒りにかられてその「箱」をめちゃくちゃに破壊する。

“Blast and blister the cursed box then!” roared my uncle, in a terrific voice, sudden as a squall. Running at the box, he dashed his bare foot into it, and with astonishing power all but crushed in the side. Then seizing the whole box, he disemboweled it of all its anacondas and adders, and, tearing and wrenching them, flung them right and left over the water. (p.259)

語り手が、「人生あるところには希望もありますよ。」(p.259) となだめようとするも、叔父は「人生あるところには絶望ありだ。」(p.259) と怒鳴り返す。このあたりにも、小説の発表のチャンスを失ったメルヴィル自身の心の葛藤と焦燥感が垣間見える。

叔父に終始従順に付き従う老従僕Yorpyの存在に、これまで提示してきた構図を当てはめるならば、彼こそメルヴィルの家族を象徴しているといえるかもしれない。Yorpyについては、奴隷という言葉及はないが、南北戦争以前という状況から察するに、黒人奴隷である可能性は高い。Yorpyは叔父に完全に服従し依存している。それでも、10年間無理を通し続けたであろう叔父の傲慢さに、時に泣き言も飛び出す。

“Duyvel take te poxl” muttered Yorpy, who was a sort of Dutch African. “De pox has been my cuss for de ten long’ear.” (p.255)

なまりの強いYorpyが言っていることは、「こんな箱悪魔にくれてやれ。10年もの長い間ずっとこの箱はおれにとって災いの種だった。」ということだが、一家の生計を支えるメルヴィルと家族の関係をここでも、叔父とYorpyとの関係のなかに戯画化して描いていると解釈できないだろうか。実験が失敗に帰した後、島を離れ落ち着きを取り戻した叔父は、もはや残骸でしかないはずの箱を取り戻すために引き返す。その残骸が「上等の薪箱」ぐらいにはなるだろうし、「それに、この忠実な老ヨーピーのためにも、古鉄を売れば煙草銭ぐらいにはなる」(p.260) からであった。これには、Yorpyも感激して、こう感謝と安堵の言葉を発する。

“Dear massa! Dear old massa! Dat be very fust time in de ten long’ear yoo hab mention kindly old Yorpy. I tank yoo, dear old massa; I tank yoo so kindly. Yoo is yourself agin in de ten long’ear.” (p.260)

10年ぶりに自分自身を取り戻した叔父の姿は、世間の不評を買ってでも革新的な創作を続けてきたメルヴィ

ルのある種の諦念を表す描写であろうか。無名の雑誌投稿作家として、いくばくかの原稿料を家族のために稼ぎ糊口を凌ぐ自らの姿を冷笑的に写し出しているといえるだろう。それでもYorpy（家族）の感謝の気持ちの言葉を聞いて、叔父は満足気にその心情をYorpyのなまりをもじってこう吐露する。

“Ay, long ears enough,” sighed my uncle; “Aesopian ears. But it’s all over now. Boy, I’m glad I’ve failed, I say, boy, failure has made a good old man of me. It was horrible at first, but I’m glad I’ve failed. Praise be to God for the failure!” (p.260)

叔父は自らの愚行を思い知り、冷静さを取り戻した。「イソップの耳」で叔父が我に返り、理性と慈悲の心を思い出したのは、この作品中最もウィットに富んだ一捻りであろう。イソップの寓話『ライオンの皮を着たロバ』は、ライオンの毛皮を被ったロバが、他の動物を怖がらせて得意になっているが、突き出た長い耳に狐が気づき正体がばれるという話である。この寓話の教訓は「身の丈をわきまえよ」ということだが、メルヴィルはこの作品で、「ライオンになろうとしたロバ」に、機械化に邁進し続ける19世紀アメリカにおいて、発明によって一攫千金を目論むあまたの失敗者の一人として、自らを戯画化した叔父を選んだ。また、叔父は、Ahabのごとく「箱」に洗礼を与え、答えを求めて探求する素振りを見せるが、所詮は「ライオンになろうとしたロバ」に過ぎず、AhabやPierreのような真理探求のヒーローとは程遠く、失敗はあるがままだに享受する普通の人間に戻る。つまり、叔父は惨事を回避したのである。そこには、偉大さは認められず、卑小な人間の小賢しさしか残らないかもしれない。しかし、彼は狂気からは救われ、安堵のうちに慈悲深い人間らしさの表出を見せることができる。だからこそ、叔父は感謝の気持ちを言葉にせずにはいられなかった。（前引用）

Bickley, Jrによれば、この物語の構成は探求の物語（quest）の手順を踏んでいるという⁽⁷⁾。すなわち、先ず流れに逆らって秘密裏に困難な旅をして、目的地に向かう。そこは10年の探求の結果に直面する場所でもある。探求には助手を要する。経験を通して探求者は精神的啓発を受け、最後に帰還する。

そうであるならば、叔父にとってつまりメルヴィルにとって、身の丈を知り自らの小説家としての野望の無謀さを思い知り、今その残滓のなかにいくばくかの生活の糧を見出すことによって、ささやかながらも一時の安寧を得ることになったといえる。ライオンの威を借る狐と自嘲しながら。語り手が聞く叔父の今際の言葉、「失敗の神に栄光あれ」（p.261）は、生きている間には自分の小説が理解されることはないだろうというメルヴィルの諦念を表しているのかもしれない。イソップにならいこの物語の寓意を抽出するならば、

Traveling naturally down the “universal current” leads not “toward utter oblivion,” but to kindness and happiness (250,260). After his failure, the uncle’s face “kindled with strange, rapt earnestness” (261). The narrator never forgets “that look,” and his story, born of failure, brings immortality to his uncle (261).⁽⁸⁾

とJohn Staufferが指摘するような素朴な教訓になるのだろうか。叔父が不滅の存在になり得たかどうかは置くとして、メルヴィルはこの物語に滑稽さや風刺や寓意などを付託したことは明らかであるが、それ以上に、心の救済という人間的な価値観の肯定にまでは踏み込んでいないのではないか。

2. “The Fiddler” (1854) — 欺かれる人

“Happy Failure” と同時期に書かれたと思しき “The Fiddler” (1854年9月Harper’s誌に匿名で掲載) もまた、同様にメルヴィルの伝記的解釈を誘う。

輝かしくも短い経歴の後、忘れ去られていく芸術的天才が、直面する厳しい現実のなかで感じるある種の静謐が余韻となる作品になっている。メルヴィルの作家としての落胆が滲み出ていると感じさせる展開を見せる。

冒頭から、

So my poem is damned, and immortal fame is not for me! I am nobody forever and ever. Intolerable fate! (p.262)

と嘆く一人称の語り手の名はHelmstoneなる詩人であり、メルヴィルの分身のような存在であるが、この人物も戯画化されて描かれている。Standardという名の彼の友人が彼に、明るく若々しく朗らかであるが40歳は過ぎていられるHautboyという男を紹介する。三人は評判の道化師が出演するというサーカスを見に行く。HelmstoneはHautboyの「純粋な楽しみ方を見ていると幸福とはこういうものなのかという実感をもって深く感銘を受ける」(p.263)のであった。その後、三人はレストランで食事をした際も、語り手はHautboyの「卓抜な判断力」にますます強い感銘を受ける。その理由というのが、

It was plain that while Hautboy saw the world pretty much as it was, yet he did not theoretically espouse its bright side nor its dark side. Rejecting all solutions, he but acknowledged facts. (p.264)

Hautboyが席を立つと二人は、彼についてあれこれ詮索する。Standardがかつての天才俳優Master BettyとHautboyの関連性について仄めかすと、語り手はそれを一笑に付す。「名優ベティーはもうとっくに亡くなっていて埋葬されているからね」(p.265)と言って、Hautboyの類まれな才能は認めつつも、天才とはかけ離れた平凡な中年男に過ぎないと語り手は断じるのである。ところが、そこにHautboyが戻り、二人を彼の住むアパートへと誘う。この時の次のやり取りが興味深い。

“If you will promise to fiddle for us, we will,” said Standard.

Fiddle! Thought I—he’s a jigembob fiddler then? No wonder genius declines to measure its pace to a fiddler’s bow. My spleen was very strong on me now.

“I will gladly fiddle you your fill,” replied Hautboy to Standard. “Come on.” (p.266)

表面上の意味は—「バイオリンを弾いてくれると約束してくれるなら、お供しましょう。」とスタンダードは言った。バイオリンを弾くだって!と私は思った。じゃあ、この男は得体の知れないバイオリン弾きというわけか。天才がバイオリンの弓に調子を合わせるなんて断るに違いない。今や私は相当に苛立たい思いにかられていた。「喜んで、心ゆくまでバイオリンを弾きましょう。」とHautboyはStandardに答えた—となる。“fiddle”には「騙す、騙る」という意味も潜んでいる。したがって、下線部分はそれぞれ、「騙してくれると」、「詐欺師だって!」、「詐欺の道具」、「騙しましょう」という含意があることが分かる。

さて、Hautboyが演奏を始めると、語り手は完全に魅了され、その魔術的なバイオリンすなわち魔術的詐術にたちまち降参してしまう。帰り道で、語り手はこの謎めいた男の正体をStandardに問うと、実は並外れた天才で少年時代にはすでにあらゆる栄光を勝ち取り、誰もが驚嘆する神童であったという。だが、今では彼を知る者はなくバイオリンを教えることで生計を立てているというのだ。

Grammed once with fame, he is now hilarious without it. *With* genius and *without* fame, he is happier than a king. Amore a prodigy now than ever. (p.267)

彼の本名は読者には明かされない。ただ、耳打ちされた語り手が、子供の頃劇場でその名を称えて叫んだことがあるとだけ言及される。翌日、語り手は詩人になることを諦め、バイオリンを買い求めると、Hautboyのレッスンを受けるため喜々として出向くのであった。

物語のこの最後の部分を、Hautboyの経歴に込められた教訓を読み取れず、あたら自分の進むべき道を見失ってしまった語り手の行き方への痛烈な皮肉と解釈することもできる⁽⁹⁾。また、その延長として、詩人になろうという努力と夢を、精神的には死んだも同然のHautboyの技量に感激してしまい、あっさりと捨て去ってしまう語り手の生き方を、「軽率で愚かな男」の話として笑い飛ばそうという解釈も生まれる⁽¹⁰⁾。

確かに語り手の行動は、直情的でユーモラスに映る。メルヴィルが自虐的に自らの作家としてのキャリアの行く末を案じて、なかば諦念にも似た感情で投げやりな終末をこしらえたというのだろうか。Standardなる友人の行動も奇妙だ。彼の名は、「標準、基準、規範」を意味するが、この物語においては、語り手とHautboyの間に立って両者の関係のバランスを取るようなことはしない。むしろ、語り手をけしかけるようにHautboyに接近させ、感化させようとしている感がある。

もし、Hautboyの存在を、語り手の言葉を額面通りに受け止め、卓越な判断力をもち世界を皮相的に見ることもなく享受する人物と想定するならば、また、

Hautboy is one of those few men who in their frankness and wisdom bring into rare balance the admirable traits of the Melvillean maskless man.⁽¹¹⁾

と持ち上げて称賛してしまうのであれば、語り手の行動は、いかにも陳腐で滑稽ではないだろうか。それだけの目的でこの作品が書かれたと評価してしまうのは、いささか残念である。

メルヴィルはこの後、*The Confidence Man* (1857) を書いている。人がいかに巧妙に人を欺き信頼を勝ち取るかを、人間の属性に根差しながら証明して見せる展覧会のような小説である。“The Fiddler”においても、メルヴィルはナイーブな失敗した詩人が、その感受性ゆえにもう一人の失敗した芸術家のなかに光明を見出し、まっしぐらに自己投影し同化しようとする悲喜劇と見るべきではないかと思う。そもそもHelmstoneは懐疑的でしかも冷笑的な性格の持主として登場し、徐々にHautboyに魅了されては、自問しつつもそれを突っぱねようとする両義的な態度を繰り返していく。サーカス小屋では、語り手はHautboyの姿に真の幸福を見出したが、自らの「絶望的な気分」(p.263)は払拭されることはなかった。レストランでは、Hautboyの「卓越した判断力」(p.264)に深い感銘を受けるが、一方で「並の才能に過ぎない」(p.265)とStandardに言う。ところが、Standardはかつて天才的の神童の名優と謳われたMaster Bettyの名を口にし、両者の関連性を匂わせながらも、結局はそれを否定し語り手を混乱させる。極めつけはHautboyの部屋で彼がfiddleを弾く場面だ。その曲というのが、“Yankee Doodle”という独立戦争時代の流行歌である。そのとたん、「意地悪な男の魂はその悪魔的なバイオリンに完全に降参してしまった」(p.266)からであった。そして、最後に駄目押しのごとくStandardから、Hautboyが途方もない天才であることを打ち明けられると、語り手は完全に打ちのめされ、まるでHautboy教に改宗するように教えを請いに参じるのである。

こうして見ると、巧妙に仕掛けを施しているのがStandardであり、Hautboyはただ明るく器用な中年男に過ぎないのかもしれない。もしそうであるなら、StandardこそがConfidence Man (信用詐欺師) ということができる。したがって、HelmstoneはStandardに騙され、盲目的に平凡なる存在を天才と錯誤したということになる。Dillinghamの喩えを借りれば、「ロバになろうとしたライオン」の寓話である⁽¹²⁾。この寓意がメルヴィル自身を喩えているとすれば、あまりに皮肉で自己憐憫の過ぎはしないだろうか。もしそこに教訓を読み取るとすれば、人は純粋なものに対しては目が曇り真実を捉えそこねてしまうことがある、とでも言えようか。あるいは、欺かれる方が幸福な場合もあるという人間性を例示した物語なのであろうか。

3. “Jimmy Rose” (1855) —敗者への挽歌

“Happy Failure”の主人公同様に、この物語の主人公Jimmy Roseもまた、語りの現在においてもこの世にはいない。そもそも、語り手William Fordは、冒頭今は老いの身となった自分にかつて起こった奇妙な出来事

を、解きほぐすように語り始めるのだ。語り手は現在、ニューヨークで歳の離れた若い妻と二人の娘とメイドと共に暮らしている。彼は思いがけず、街なかにある古い邸宅を相続することになる。その家は、90年を経た後も少しも変わらず、かつての持主だった一人の人物の名残が今でも多く見られる。その人こそ、往時凛としてかつもてなしの心を持ったJimmy Roseであった。とくに、居間の壁紙は孔雀と薔薇模様で、語り手はJimmyの輝く頬を思い出さずにはいられなかった。Jimmyは手広くビジネスを展開していたが、所有する2隻の船が沈没し、ビジネスに挫折すると、すっかり落ちぶれてしまい、やがて姿を消す。語り手は彼を助けたいという一心でついにその居場所を突き止め、会いに行くが家に入れてもらえない。そして、25年が過ぎた。その後語り手は再びJimmyを目にする。Jimmyはニューヨークに住み続け、自らの品性ある物腰と長年の友人たちの加護のおかげで、細々と生きながらえていた。年に70ドルを受け取り、その利子で儉約した暮らしを立てていたが、ティータイムになると、かつての友人宅を訪ねては、物乞い同然にせびっていたサンドイッチで命をつなぎながらも、彼は常に礼儀正しく微笑みを絶やさず、頬はいつも薔薇色に輝いていた。彼が死んだ時には、裕福な市議会議員の娘に看取られた。

以上がこの短編のプロットであるが、“Jimmy Rose”もまた、メルヴィルの自伝的要素には事欠かない。家の詳細な描写には、メルヴィル自身が住んだいくつかの家の特徴が見られるし、Jimmy Roseは、メルヴィルの父の境遇に似ている。破産した点も祖父に似ている。また、語り手同様、メルヴィルにも妻、二人の娘とメイドが同居していた⁽¹³⁾。

自らの血縁者をモデルに創作したであろうことは容易に想像がつくし、だからこそ情感豊かで哀愁のこもった描写になっていることも確かであろう。しかし、ここではあえて伝記との因果関係に拘泥することは避けた。あまりにもその密接な関連性の度合いが高いからである。

さて、この作品において最も効果的と思われる手法の一つに挙げられるのが、語り手が哀感と詠嘆を込めてつぶやく5回の反復フレーズである。先ず、譲り受けた邸宅のなかでもひとときJimmy Roseとの深いつながりを語り手に感じさせる「孔雀の間」もしくは「薔薇の間」と呼ばれる部屋を見て、深い感慨にふけりながらつぶやく“Poor Jimmy Rose” (p.338) (この部分は他より短いため、反復は4回とする場合も多い)。ここではクォーテーションマークを施しているが、この文は地の文でありいわゆる描出話法を使っており、語り手の心の声の表出を示している。2度目は、Jimmyが破産し、もはや以前のような華やかなパーティーの主演として輝くこともなくなった彼の運命を語り、悲哀を込めてつぶやく“Ah! Poor, poor Jimmy—God guard us all—poor Jimmy Rose!” (p.339)。3度目は、25年振りに再会を果たした時のことで予想に反して、やつれていないばかりか、その両頬は「古のペルシャの薔薇が開花いた」(p.342)ように輝いていた。しかし、その困窮の様子は、ほろをまとうろつき回る貧者そのものであった。それでも、「洗練された言葉使い、礼儀正しさと微笑み」(p.342)をそなえたかつての紳士の姿に、“Poor, poor Jimmy—God guard us all—poor Jimmy Rose!” (p.342)と嘆息する。4度目は、Jimmyがかつての友人の家を訪ね歩き、午後のお茶の時間に紅茶とバター付きパンを提供され、あくまで威厳を保ちながら紳士的に振る舞い、家族を飽きさせないように話題を提供し、食事にありつき必死の思いで空腹を満たしている様子に、“Poor, poor Jimmy—God guard us all—poor Jimmy Rose!” (p.343)とつぶやく。5度目は、死の床についてJimmyを見舞いに行った時、語り手は再び“Poor, poor Jimmy—God guard us all—poor Jimmy Rose!” (p.345)と嘆き落涙する。そして、Jimmyの死を読者に知らせると、語り手は物語の現在に戻る。孔雀の間に座り、かつてこの場所で溢れんばかりの豪華な生活を謳歌したこともあるJimmyの悲惨な運命に思いを馳せ、

Transplanted to another soil, all the unkind past forgot, God grant that Jimmy's roses may immortally survive! (p.345)

という祈りの言葉で物語に幕を下ろす。

伝承文学の一つの形式に“ballad”という物語詩のジャンルがある。その特徴の一つに反復句（リフレイン）

がある。文学辞典によれば、次のように定義される。

…it (ballad) employs a variety of devices to prolong highly charged moments in the story and thicken the emotional atmosphere, the most common being a frequent repetition of some key word, line, or phrase.⁽¹⁴⁾

また、その特徴として「一つの事件に物語の視点が合わされ、事件が破局へ向かうところから始まる」、「表現は素朴で決まった言い回しの反復が目立つ」⁽¹⁵⁾

“ballad”という形式は、もちろん詩歌のカテゴリーに属するが、“Jimmy Rose”は、まさに“ballad”の要素を小説のなかに効果的に活かした類まれな例といえるだろう。上述した同一語句のリフレインの他に、破局への向かうというプロットも“Jimmy Rose”に当てはまる。Jimmyにとっての破滅への道は、ビジネス上の失敗であり、しかも偶発的事故によるところが大きい。“Happy Failure”の叔父のような宿命付けられた失敗者とはちがうのである。また、“Fiddler”のHelmstoneのごとく容易に印象を刻印され欺かれるタイプともちがう。数十年に渡り語り手に感銘を与え、貧しさのなかにも輝きを失わず逆境に耐え続けるJimmy Roseの姿に、作者メルヴィルはある種の美德を付与している。擦り切れた衣服をまとい、未だに裕福であり続けるかつての友人たちの施しを受け、空腹を満たす所業は、確かに世間の目から見れば、恥ずべき身上なのかもしれない。ところが、Jimmyは図書館に通い勉強し、友人たちとお茶の時間の話題に事欠かないように努める。決して微笑みを絶やさず、礼儀正しい身のこなしを忘れず、金持ち相手のお世辞は魅力的な施しであった。そして何より、頬は血色がよく薔薇のように赤く輝いていた。

裕福だった時も、貧しくなっても、Jimmyは常に、「施し」のひとであった。他人を傷つけるようなことはしない彼であったが、それでも一度だけ人間不信に陥ったことがあった。破産直後、それまで懇意を装ってパーティーに参上しては高級ワインを貪り飲んでいた輩が、掌を返したように寄り付かなくなったばかりか、Jimmyの失敗のせいで損失を被ったと憤慨する者まで出た。そんな折、語り手はJimmyを案じて、その住まいを見つけ出し、面会を求めるが拒否される。“I can trust no man now.” (p.341) とその時Jimmyは人間不信の心情を吐露する。とはいえ、生来の「施し」(alms)の精神の持主であるJimmyが、真の人間嫌いに至ることはなかった。それは自然の摂理に背くことであった。それを語り手はこう述べる。

Perhaps at bottom Jimmy was too thoroughly good and kind to be made from any cause a man-hater. And doubtless it at least seemed irreligious to Jimmy even to shun mankind. (p.342)

Jimmyが病に倒れ、とうとう死が間近に迫ってくると、彼の「施し」の精神と生き方はある意味、報われることになる。とある有力な市議会議員の娘が甲斐甲斐しく、この哀れな老人の介抱をしたことはそういう文脈で見るとべきだろう。心優しい娘に死に水を取ってもらったJimmyのことを、今回想する語り手は、かつて自分の面会を拒否した時Jimmyがこもっていた「孔雀の間」に座っている。つまり、物語冒頭の場面に戻るのである。家の外装の描写から始まり、最後に部屋の内部の様子を描写しながら物語は終わる。したがって、語り手のなかで流れた時間はほんの束の間であった。そういう風にこの物語の構造は成り立っている。全てが終わった後に、その全容を知る語り手が話し始めるという円環構造のパターンは、*Moby-Dick*のミニチュア版といえなくもない。前述した最後の祈りの言葉には余韻と静謐さが漂う。

その効果を倍増させている手法としての「リフレイン」について考察してきたが、James W. Garganoは、この点について、次のように言及している。

Indeed, the story's constant refrain ('Poor, poor Jimmy Rose—God guard us all—poor Jimmy Rose!') is a reminder both of Jimmy's impecuniousness and the poverty of his means and ends in adjusting to

distress.⁽¹⁶⁾

メルヴィルがJimmyの境遇をあまり切迫した貧困とは描いていないので、改めてその窮状を読者に思い出しってもらうために、このレフレインが挿入されているというのだ。文学的効果を狙っているというよりは、全体の描写のバランスを取るためということだろうか。一方、Dillinghamはこのレフレインについて、次のように論じている。

What he is saying in this refrain is not that Jimmy was a victim of himself and society (although to a large extent, of course, he was). Nor is he praying that the rest of us be spared Jimmy's fate. When he says "poor, poor Jimmy," he is seeing under the rose, seeing mortal man's pathetic frailty and tragic vulnerability. When he prays that "God guard us all," he is asking to be delivered from the embittering, destructive pull of this pessimistic vision.⁽¹⁷⁾

語り手の鋭い洞察力がJimmyの奥底にある悲劇的脆弱さを見極めているがために、表出したいたまれない心情の現れとしてこうした言葉が繰り返され、自らもこの場から救いだしてもらいたいと願っているというのだ。かなり語り手に感情移入した解釈である。語り手が優れた観察眼を持っているがゆえに、もはや憐憫の情を超え、自らもこんな場面からいなくなりたいと神に祈るほど、今やもう誰も救われはしないということへの嘆きなのであろうか。

Jimmyは経済的に成功者となり、その後破綻し失敗者となるが、失敗者という立場に身を置いたからこそ、語り手のいう「施し」の精神を十分に発揮し、「美德」を示し得た。語り手が嘆くのは、その「美德」が減びゆくことに対しての哀感のためである。「神よ、我らみんなを守り給え」という祈りは、Jimmyのような人間および彼らを理解しながら助けられない語り手のような人間すべてに対するものである。したがって、作中のリフレインは、Jimmyに代表される社会的には失敗者に成り果ててしまいつながりながらも、「美德」を失わず健気に生き抜く人々への共感の表明であり、作品自体を優れた挽歌に仕上げているといえる。

結び

メルヴィルは、Hawthorneを称賛したエッセイ、“Hawthorne and His Moses” (1850) のなかで、皮相的な成功のためにヨーロッパの小説の模倣に走るアメリカの作家たちを批判してこう書いている。

But it is better to fail in originality, than to succeed in imitation. He who has never failed somewhere, that man can not be great. Failure is the true test of greatness.⁽¹⁸⁾

その3年後、失敗者の短編小説を創作する折には、おそらくこの自らの信念が念頭にあったと考えるのが自然である。“Happy Failure”の叔父の「失敗してよかった。失敗したお陰で私は良い老人になれた。」(p.260)という言葉も同根であろう。そこには、精神的な成熟が読み取れる。一方、“The Fiddler”のHelmstoneには、精神的な未成熟が見られる。おそらくは皮相的な成功しか求めていなかったがゆえに、容易に欺かれるという寓意が読み取れる。また、“Jimmy Rose”では、皮相的な成功から見放された主人公が、人知れず成熟した精神を表すのであるが、人としての幸福にはつながらないという不運が読者に深い余韻を残し、リフレインという手法とも相まって詩的效果をあげている。

（註）

- (1) Hershel Parker, *Herman Melville: A Biography Volume 2, 1851-1891* (The Johns Hopkins U. P.), p.162に*New Monthly Magazine* (July 1853) に掲載された "American Authorship" という批評文の引用として再掲載されている。
- (2) *ibid.*, p.163に以下の記述がある。
The Harpers must have told him that the best way of working off his debt to them and getting ahead would be write for their magazine, where *Pierre* would not be an obvious liability, for stories were published anonymously and a reader would not have to get past the barrier of the devalued name of Herman Melville.

- The family had reason for rejoicing that Melville would not continue to risk denunciation as a novelist of American high life but instead be an anonymous contributor of magazine pieces.
- (3) A. Robert Lee ed., *Herman Melville: Critical Assessments* (Helm Information), R.Bruce Bickley, Jr, 'The Happy Failure': The Paradox of Defeat, p.360に以下の記述がある。
Critics have treated 'The Happy Failure,' 'The Fiddler,' and 'Jimmy Rose' as three successive 'studies in the values of failure,'
- (4) *The Writings of Herman Melville* (The Northwestern-Newberry Edition) *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, p.254. 3作品からの引用文は原文、和訳を問わず以降はページ数のみを記す。
- (5) Carl Rollyson and Lisa Paddock, *Herman Melville A to Z* (Checkmark Books), p.206
- (6) William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction 1853-1856* (The U. of Georgia P.), p.152
- (7) R.Bruce Bickley, Jr, p.359
- (8) Wyn Kelley ed., *A Companion to Herman Melville* (Blackwell Publishing), p.226 John Stauffer, *Melville, Slavery, and the American Dilemma*
- (9) 林信行、『ホーソン、メルヴィルとその周辺—文学のなかの人間像』（北星堂書店）、pp.125-126
- (10) 野間正二、『読みの快楽—メルヴィルの全短編を読む』（国書刊行会）、pp.224-225
- (11) James E. Miller, Jr., *A Reader's Guide to Herman Melville* (Syracuse U. P.), p.169
- (12) Dillingham, p.159
- (13) Robert L. Gale, *A Herman Melville Encyclopedia* (Greenwood), pp.214-215
- (14) *Merriam Webster's Encyclopedia of Literature*, p.101
- (15) ブリタニカ国際大百科事典（電子辞書版より）
- (16) *Herman Melville: Critical Assessments*, 193 Melville's 'Jimmy Rose' by James W. Gargano, p.405
- (17) Dillingham, p.314
- (18) *The Writings of Herman Melville* (The Northwestern-Newberry Edition) *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, pp.247-248

The Narrative of Herman Melville's Later Fiction (4) : Stories on Failure

Yuichi MASUBUCHI

The purpose of this paper is to clarify the meanings and values of Herman Melville's three stories on failures: "Happy Failure," "The Fiddler," "Jimmy Rose."

Key Words: Herman Melville, story, failure